

# MWM式言語訓練プログラムと Semantic Organizerの 統合について

岡田 明

言語指導の基本は子どもの要求等と応じた指導を展開することにある。しかし、場合によってはよくできたプログラムを用意した、そのための教材等を用意することも有効であろう。

ここでは、MWM式言語訓練プログラムと“Semantic Organizer”をとりあげ、その統合の可能性を探究した。

キーワード：セマンティック・オーガナイザー エム・ダブリュー・エム 聴覚的受容 言語表現  
聴覚音声連合

## I. 問題

言語指導の基本は子供のおこなう自然な体験の中で子供の行動や心の動きをとらえながら子供のニーズに準じた指導を与えていくことであろう。

しかし、場合によっては言語指導プログラムを用意し、そのための教材を用意しておくことが言語指導の効率化に役立つこともあると思われる。ユネスコの調査でも formal な方法と informal な方法で有意差は見出だしていない。

ここでは2つのプログラムをとりあげ検討を加えながら、その統合の可能性を探ることを研究課題とする。

## II-1. MWM について

MWMとはこのプログラムを作成した3人の著者のイニシャルである。3人の著者はDr. Minskoff, E.H. (州立南コネチカット大学 特殊教育学準教授), Dr. Wiseman, D. (聖ポール小学校 児童発達研究センター所長), ならびにDr. Minskoff, J.G. (ミネソタ・グレイブズ学習障害研究スクール校長) である。

MWMはOsgoodの理論に基礎をおく。その理論的基礎は次のようである。コミュニケーション過程のモデルは次の3つの面から理論的に組み立てられる。①コミュニケーション回路 ②機構の水準 ③過程

コミュニケーション回路とは、刺激入力と反応出力とのいろいろな組み合わせのことである。刺激入力では目、耳、触覚から入る3とおりが考えられた。反応の方は、音声による場合と身ぶりや動作による場合があるから、両者の組み合わせは6とおりあることになる。その中で大切な聴覚-音声回路と視覚-運動回路だけが残された。それらは幼児に最も重要なものであるからである。

機構の水準は機能の複雑さの程度を示したものである。そこでは3つの水準が与えられた。まず対象水準は、言語表象の意味を扱うのに十分高度な機能である。

統合水準は、言語表象の配列順序や反応連鎖の習得を扱うレベルである。過去の経験から未来を予測する能力など、より自動的・習慣的な活動を扱う水準である。放射水準は、生理的過程を扱うものである。このプロセスは、教育によって変えることができないので排除された。

おもな習慣は3つである。聴覚的ならびに視覚的刺激から、意味をとり出す解号(decoding)、自分の考えなどを言葉や身ぶりによって表出する構号(encoding)、ならびに言語表象を操作するのに必要な習慣の全体である連合(association)である。

このような考察から、精神言語能力は、特定の回路を通しての特定の水準における特定の過程の

能力として規定される。

## II-2. MWM の構成

MWM プログラムは、学習障害を示す子供の治療的指導と普通児の発達の指導に使用される。

このプログラムの適用範囲は、暦年齢で5歳から10歳ないしそれ以上で、機能的には3歳から7歳の児童に適用される。

このプログラムにはいろいろな印刷物や道具が使用される。次のようなものである。

### 1) 概説書 teacher's guide

これは MWM 訓練プログラムの構成や理論や実施法などが解説されている。

### 2) インベントリー

これはスクーリング・テストである。12の項目についてそれぞれ12個の質問があり、それらに被検者をよく知る成人がチェックすることになっている。聴覚的構成とサウンド・プレディングはまとめられているので、インベントリーでは11の柱が立っている。全体的にみて、各柱で7項目以上のネガティブな反応、つまり被検が不能な課題があるときには、MWM 言語訓練プログラムの対象児となる。

聴覚的受容では「読んでやった童話の質問に答えられない」など12課題、視覚的受容では、「絵本や雑誌を見たがらない」など12項目、聴覚的連合では「絵の模写はよくできるのに想像的で創造的な絵がかけない」など12項目、言語的表現では「絵や体験について説明することがむずかしい」など12項目、動作的表現では「表情やボディ・アクションで感情の表出ができない」、「形態などの模写がむずかしい」など12項目、聴覚的記憶では「10まで暗唱できない」など12項目、視覚的記憶では、「TV や映画などの事件の順序が再生できない」など12項目、文法的構成では「非常に短い単文しか使用できず、表現に変化がない」、「過去形が使えない」、「否定形が使えない」など12項目、視覚的構成では「自分の使っている本とちがった書体だと理解できなくなる」、「点線の絵が理解できない」など12項目、聴覚的構成とサウンド・プレディングでは「歌の中の単語が理解できない」、「町のドリルの音などノイズがかかるとことばがわからなくなるし、適応できなくなり、仕事ができなくなる」など12項目である。

これらの結果は、プロフィール・チャートにプ

ロットされ、7項目以上ネガティブな反応がある場合、学習障害児とされる。

### 3) 教師用マニュアル

これは訓練のやり方を述べているもので、教師用の手引書とも言えるものである。

### 4) レコード

聴覚的刺激を与えるための訓練材料である。

### 5) 語彙表

これは訓練されるべき単語を集大成したもので、各品詞ごとに訓練の指針が与えられている。

### 6) ポートレート

4人の少年少女の全身像を描いたものである。ついたてもあり、それぞれを立った状態で知覚できるように工夫されている。

### 7) 刺激板 stimulus scenes

誕生会の絵、嵐の絵、買い物の絵、遠足の絵、遊園地の絵、動物園の絵、プールの絵、病気の絵、アイススケートの絵、クリスマスの絵、雪合戦の絵、航空旅行の絵、ドライブの絵などから成り、大きな画用紙いっぱい描かれている。これを見て言語表現させるのである。

### 8) ワークブック

訓練がかなり進んだ段階で、12の訓練項目についてドリルをするものである。絵や文字や数字で構成されている。

## II-3. 訓練の内容

### 1) 言語表現

順序が多少異なるが、まず「言語表現」の訓練内容について説明することにする。

①言語表現の訓練ではまず模倣からはじめる。実物のりんごを提示し、訓練者がりんごと言ってごらんと言ってりんごと言わせる。文の模倣では「これはボール。これはボールと言ってごらん」と言ってそのように子どもに言わせるのである。

②次はラベリングである。ワード・ブックリスト、表現語彙の検査道具などが使用される。ほとんど前述の模倣と同じ手続きで、名詞、動詞、記述語 descriptive word、前置詞の指導が展開される。

③次は定義の指導である。まず聴覚的、視覚的に呈示された語の理解が指導される。「お医者さんはどんな仕事をしていますか」と絵のそばにおいて聞くのである。ついで絵は排除し、聴覚的に語を呈示「～は何ですか?」と聞いて応答を求めていく。

④記述の指導。まず項目一つのみの記述をさせる。たとえば女の子のポートレートを示し、「これについて知っていることを全部話してください」という指示で記述させる。ついで場面の記述に移る。そこでは「刺激板」などを利用し「絵でみたことをお話ししてください」という指示で記述させる。

⑤会話の指導では、まず一般事項の会話がとり上げられる。「あなたの名前は？ 髪の色は？ 目はどんな色をしているのかな？」など自分について、ついで家族、学校、ペットなどについてのお話をさせる。

次には、カードを利用し役割演技をする。また質問ゲームもする。どんな大きさ、どんな色、どんな形……とどんどん聞いていく。

さらにお話の続きを言わせる活動がある。「ジェニーは、お母さんたちと海へ行きました。ジェニーが海へ着くと、ジェニーは……」と言ってその後どんなことが起こったかお話しさせる。

⑥独白(モノログ)。ある物を見てそれについての話をさせる。最初は10秒、次に30秒、そして1分へと話す時間をのばしていく。

次には子どもがあるお話を聞いた後、自分のことばで言い換えてお話をする。独自の記述という訓練項目では、「歯をみがく時どうするのか話してごらん」と言って一人で話をさせる。

想像的独白では、「3つの願いがかなうとしたら……」、「大きくなったら、私は……になりたい」と言って子どもに話をさせる。

## 2) 動作表現

動作表現には6つの訓練領域がある。

①粗大運動の協応 ここでは自然な動きのスキル(ころがる、すわるなど)、バランスのスキル(つま先で立つなど)、リズム技能(音楽にあわせて身体全体をうごかすなど)、身辺自立の技能(くつや帽子を身につけるなど)が訓練される。

②こまかい運動の協応 目と手の協応(ビー玉通)、形と絵を描く、文字と数字をかくなどが指導される。

③ボディ・イメージ 自分の身体の部分、他人の身体の部分を確かめ、身体を描いたカードの欠けた部分を探し、身体の絵合わせパズルなどが指導される。

④左.右の区別 左から右への身体の移動、自分の左右の弁別、他人の左右の弁別などが指導される。

⑤行動を通しての考え方の表現 ジェスチャー遊び、パントマイムなど。

## 3) 視覚的記憶

視覚的記憶では8つの訓練領域がある。

①基礎技能 カードでたとえば「くつ」と「バナナ」を呈示、順序に対する選択的記憶を指導する。

②物の系列記憶 物の系列の再認と再生が指導される。

③絵の系列記憶 絵の再認と再生を指導。

④行為の系列記憶 いくつかの動作を呈示し、そのとおりに再生させる。

⑤色の系列記憶 絵カードなどの再認と再生。

⑥形の系列記憶 ワークブックなどを利用し形の再認と再生が指導される。

⑦数の系列記憶 1～20の記憶とたし算の記憶が指導される。

⑧文字の系列記憶 文字と単語の記憶を指導。

## 4) 聴覚的記憶

順序に対する選択的注意などの指導の後、①指あそび、詩・歌の記憶 ②聴覚的指示 ③無関連な語の記憶 ④数の記憶 ⑤文字の記憶 が指導される。

## 5) 聴覚的連合

①関係把握 ②カテゴリー化 ③矛盾の指摘 ④推論 ⑤推理 ⑥想像 ⑦課題解決 が指導される。

## 6) 聴覚的構成

①削除した音の完成 ②歪んだメッセージの理解 ③語の再生 が指導される。③の例「ニャーとなく動物の名は？」「その語は“mat”と同じ韻です。」「“cat”ですか “dog”ですか？」。

## 7) サウンド・ブレンディング

分離した音節や音を合成したり、それらのあるひとつの語にまとめたりする能力が指導される。

## 8) 文法的構成

ここでは単文、複数、否定、発音、時制、所有格、命令文、疑問文、比較、複雑な文、関係文が指導される。

## 9) 視覚的構成

絵画の配列的再生、視覚的ノイズの絵の理解、文字や数字の完成、ドット絵の完成、絵画の中の欠如部分の指摘などが指導される。

## 10) 視覚的連合

ここでは意味的に2つの絵を結びつけること、カテゴリーの認知、カテゴリー・ラベルの再生、

絵の欠陥部分の指摘, 絵の余分部分の指摘, 不合理な絵の説明, 2つ以上の絵の配列, 3つの中のまん中の絵の構成などが指導される。

11) 聴覚的受容

名詞, 動詞, 記述語, 前置詞などの理解が指導される。

12) 視覚的受容

名詞の弁別, 大きさや位置の弁別, 大きさの概念の理解, 位置概念の理解, 動詞の理解, 状態の理解, 文字間の連合などが指導される。

III. Semantic Organization : (S.O.)  
について

これはオフストラ大学の H.A. Robinson 教授らの提唱している考え方である。S.O. はトピックを中心にすえて, 関連する概念, related idea (R.I.) をまわりに配置したものである。トピックは中心に置かれ, できるだけ少ない単語で表現される。

それは言語と認知体系との橋渡しをするものである (図2)。

S.O. により, 子供は言語と認知体系とを結びつけるプロセスや方略を学習することができる。

S.O. は意味の関係を非常に強調する。子供の言語発達の初期では統語より意味論的な関係が大切

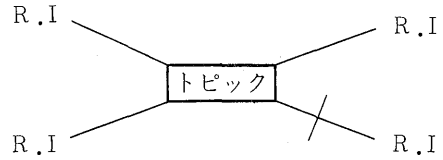


Fig. 1. Semantic Organization (ロビンソン)

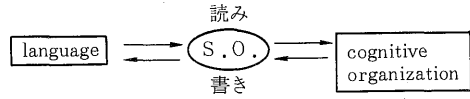


図2 言語, S.O.ならびに認知体系の関連(ロビンソン)

だからである。初期の S.O. では, 子供はある単語が他の単語によってどのように機能するかを理解することが大切である。動詞は名詞と関連づけて学習され, 一方名詞は動詞と関係づけて学習される。

また, 語彙が獲得されるとは, 各単語があるものとは結びつくが他のものとは結びつかないという, ある種のカテゴリー, つまり意味の範囲を表しているということを理解することである。それでトピックに無関係な単語が S.O. で配置されることになる。次に S.O. の具体例を二, 三示すことにする。

第二段階: Verb Organizer

ステップ1: 歩く (動作と写真)

- 2: 子ども, 牛, 犬, 魚
- 3: 子どもが自分でorganizerをつくる。
- 4: 動詞を書く。
- 5: パラグラフの構成
- 6: パラグラフの理解
- 7: パラグラフを記憶により表現する。
- 8: 歩く   トラ   へび (+)
- 9: 走る   ネコ   電気スタンド (+)
- 10: 動詞を変える 「食べる」「かく」「のむ」  
肉を食べる: 子ども, 犬, トラ(電車)  
絵をかく: 男の子, 女の子, 大人(犬)  
水をのむ: 犬, ねこ, 男の子(自転車)
- 11: 場所を示す動詞の使用 「行く」「のる」  
「かえる」  
公園へ行く: 子ども, 犬, ネコ (さかな)  
車にのる: 男の子, 女の子, 大人(牛)

家へかえる: 男の子, 女の子, 大人(汽車)

12: 状態動詞の使用 「浮く」「もえる」「沈む」

浮く: ボート, はこ, 葉(車)

もえる: 紙, 家, 板(かね)

沈む: 車, くぎ, ストープ(はこ)

13: 主語を接続詞で結ぶ

子どもと犬と牛は歩く。

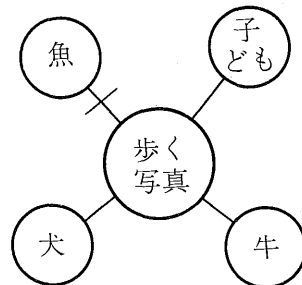


Fig. 3

14: けれども

子どもと犬と牛は歩く、けれども魚は歩かない。

15: 新しい動詞 泳ぐを使用

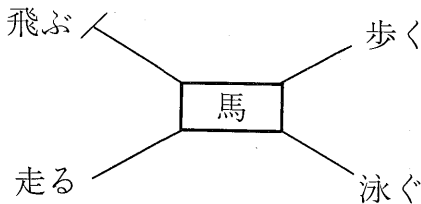
魚は泳ぐ/犬と牛と子どもは歩く (ところが魚は泳ぐ)

16: 教師が動詞をclozeし、3つの名詞から考えさせる。

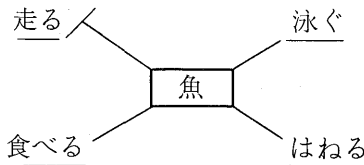
歩く 子ども, 犬, トラ(サカナ, ヘビ)

第三段階: Noun Organizer

ステップ1



ステップ2



魚は泳ぐ。魚ははねる。魚は食べる。しかし、魚は走らない。

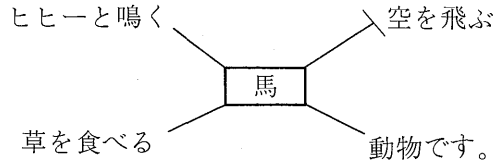
IV. 統合について

“MWM”は要素的であり、分析的である。幼児期にはもう少し全体的な総体的な把握が必要となろう。

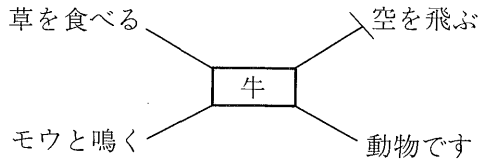
“S.O.”は意味論に重点をおき、そこから子供の統語論的整合性を志向している。

2つを検討すると、まずS.O.からはじめて概念を拡大し語いや文、文章を豊かにし、“MWM”の方に指導を移すことが大切のように思われる。

ステップ3



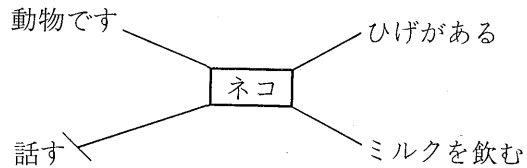
ステップ4



牛は草を食べる。牛は動物です。

牛はモウと鳴く。しかし、牛は空を飛ばない。

ステップ5



これは、ネコです。ネコはひげをもっている。

ネコは、動物です。ネコはミルクを飲む。

しかし、ネコは話さない。

“MWM”では聴覚受容や言語表現の指導でコミュニケーション能力の獲得が可能であろうし、自動配列水準の指導で言語習慣の確立が可能であろう。しかし、ある種概念学習では“S.O.”に負わなければならないであろう。

おわりに

冒頭に述べたとおり、障害児の言語指導の基本は子供のおこなう自然な体験のなかで子供の行動中心の動きをとらえながら、彼らのニードに応じ

た指導を支えていくことだろう。

しかし、一つの指導モデルを示し全体の枠組を与えることは、指導の一つの見方を支えるものであり有効な面もあると思われる。

また、うまく指導法や教材を選択すれば多様な場に応じた指導を展開させることも可能になると考えられる。

また、ITPAなどのテストを実施してもその後どう対応すればよいか問題であるが、ここでの論議は一つの対応を示すことができるものと考えられる。

セマンティック・オーガナイザーのモデルでは斎藤康男、中村真理、佐藤至英各氏の協力を得た。記して謝意を表す。

#### 文 献

- 1) Minskoff, E.H., Wiseman, P.E. and Minskoff, J.G. The MWM program for developing abilities. Educational Performance Associates. 1980.
- 2) Robinson, H.A. et. al. The semantic organizer approach to writing and reading instruction. Aspen System Cooperation. 1985
- 3) 岡田明：障害児用MWM言語訓練プログラムについて、心理測定ジャーナル, vol 20, NO. 8, 1984
- 4) 岡田明：MWM言語訓練プログラムにおけるインベントリーについて、心理測定ジャーナル, vol 20, NO. 11, 1984
- 5) 岡田明：MWM式言語学習障害児の選別検査, 坂本龍生他編, 障害児理解の方法—観察と検査法—所収, 学苑社, 1985
- 6) 岡田明：日本版MWMの研究, 心理測定ジャーナル, Vol 21, NO. 4, 日本心理適性研究所, 1985
- 7) 岡田明：読書教育の心理, 共同出版, 1967
- 8) 岡田明：言語教育の心理, 新光閣, 1969
- 9) 岡田明：最新読書の心理学, 日本文化科学社, 1973

## Summary

### Integration of the MWM Program into Semantic Organizer

Akira okada

The purpose of this article is to explain and analyse the MWM Program for Developing Language Abilities and the Semantic Organizer and then to compare two programmes. After these operation the writer searched for the way to integrate them into a teaching program for the handicapped.

The MWM Program for Developing Language Abilities is based on the model of the Illinois Test of Psycho-linguistic Abilities. The MWM Program tried to outline guidelines to the development of remedial procedures. These guidelines gave direction and suggestions, but leaved the teachers on their own to find or devise materials.

M.W.M. is the initial of three authors, Minskoff, E.H. Wiseman, D.E. and Minskoff, J.G.

The materials and teaching activities are systematic and comprehensive. They are arranged developmentally. and make possible the maximum use of psychological principles of learning. They also encompass a wide variety of teaching activities for each of the twelve areas of the ITPA testing/teaching model.

The Semantic Organizer is used to relate minor categories with a major category in a special way. All well-written material is organized around a central topic. The central topic becomes the major category of a semantic organizer. Comments in most paragraphs and longer passages are related to a topic. In semantic organizers, the comments are represented as minor categories. A semantic organizer is used chiefly to help students organize written language so that comments are logically related to a topic.

By this, children can learn processes and strategies for connecting language with a cognitive organization and can help facilitate the assimilation of language to schemes. The content and relationships are based on children's experience and interests.

In integration of the MWM Program into Semantic Organizer, we should study them carefully at the beginning. The MWM Program is rather element-oriented or analytic, while the Semantic Organizer is rather synthetic and puts stress upon semantics rather than syntax.

The writer would recommend to begin teaching by the Semantic Organizer. In the Semantic Organizer, we can expect to widen children's concept and to enrich their own word and sentences.

The MWM Program should introduce for diagnosis and remediation after the teaching by the Semantic Organizer. It would develop the language abilities for the handicapped.

**Key word:** semantic organizer, M.W.M., auditory reception, verbal expression, auditory-vocal association